

メッセージ「まず『小さい者』を大切に」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 25章31-46節

11月も半ばを過ぎましたが、急に暖かくなったり、そうかと思うとまた寒くなったり、落ち着かない気候が続いています。そのような中でもコロナの感染は日に日に拡大しています。にも拘らず、経済活動喚起のための「GoToキャンペーン」は推奨され、さらに「会食時は、『小人数、小一時間、小皿、小まめ』の『5つの小とこころづかい』を大切に、『マスクをしながら、黙って食べる』など、政治家はもはや意味の分からない、面白くない冗談しか言いません。クラスターの発生や医療崩壊を防ぐために、私たち一人一人が出来ることを引き続き注意していくしかないというのが、何ともしんどいところではあります。

今日は収穫感謝礼拝ですが、今年はコロナ感染予防のために、例年行って来た「まぶねっこクラブ」の子どもたちとの「縁農」もなく、例年に比べて収穫を実感する機会が少なかったように思います。しかし、世界中が新しい感染症に苦慮しているこのような状況の中でも、神様は一つ一つの作物の命を育み、実りをもたらして下さっています。農業に携わっておられる方々は、人手不足に拍車がかかる大変な状況にありながらも、そのような方々のお陰で、私たちは日毎に食事を頂けていることに改めて感謝を覚えます。

さて、今回の聖書の箇所は、あまり収穫感謝とは関係のないような箇所でした。『マタイによる福音書』25章のこのお話は、前の24章から続けて、「世の終わり（終末）」について記されている一連の話の中で、最後に配置されています。そして、いわゆる「最後の審判」について述べられている話だというように理解されて来ました。「最後の審判」によって、全ての人は天国に入るか、地獄（永遠の火）に入るか、右と左に、羊と山羊に分けられるというわけです。西洋の絵画では、ミケランジェロの「最後の審判」という絵が有名かもしれませんが、しかし、そのような考えは、キリスト教世界にだけあるわけではなく、東洋でも「閻魔」大王によって人の生前の罪が

裁かれるという考え方があります。ですから、世界中で人類は昔から似たような考え方をして来ていたのでしょう。

今回のこのお話も、約 2000 年前にこの地上を歩まれた実際のイエス様、歴史の中を生きられたイエス様が、そのまま語られたお話かというところ、どうもそうではなさそうです。例えば、31 節から 33 節の主語・動作主は「人の子」ですが、34 節以降は「王」になっています。似たような二つの言い伝えを、イエス様の死と復活から何十年後かに、この『マタイによる福音書』を記した人たちが、一つのお話として編集して執筆したと考えられています。また判決を言い渡された人たちの問いに対して、王様が「あなたたちは〇〇したからだ」「〇〇しなかったからだ」と返事をしているという構成も、実際に話された内容と言うよりも、如何にも人々の間で、口伝えで伝承されて来た「物語り（ストーリー・テリング）」の型式です。

歴史のイエス様と出会い、その言葉を聞き、その振る舞いを見た人々は、イエス様の語られたお話が心に残ったのでしょう。文字の読み書きができる人は全人口の数%しかおらず、羊皮紙やパピルス、インクなどの筆記具も高級品でしたので、ほとんどの人々はお話を口伝えで聞いていました。現代の私たちも、いわゆる「昔話」を本に書かれた文字で読んだのではなく、耳で聞いて覚えているように、2000 年前のパレスチナの人々もそうでした。日本の「昔話」にも、大抵「よい人」が出てくると、もう一方には「悪い人」が出てくるように、そのような対照的・対比的な登場人物による物語の構成は、人々が面白おかしく物語を覚えて、更に伝えていくためには、とても便利でした。そのためにイエス様の語られたお話にも、自然発生的にそのような変化が生じてきたのでしょう。

そのように考えてみた時、このお話が伝えている内容、イエス様が語られたことの内容の中心は何だったかというところ、それは「その最も小さな者にしたことは、私にしたことなのだ」という 40 節の言葉なのではないかと思えます。インドのコルカタで「死を待つ人の家」を始めたマザー・テレサも、この言葉を神様からの語りかけとして聞いたと言われていましたし、日本コイノニア福祉会の始まりも、この聖書の言葉だったと聞いています。恐らく、今日の「キリスト教福祉」施設の多くが、この言葉に原点を持っているのではないのでしょうか。

コロナの感染が拡大してから、「疫病とキリスト教」など、病気と宗教に

関する発言が、様々な所で聞かれるようになりました。細菌やウイルスなどが発見されるまでは、病気は悪魔や悪霊のしわざとも考えられて、それこそ「穢れ<sup>けが</sup>」として忌避<sup>きひ</sup>されました。確かに、細菌やウイルスなどの感染源から物理的な距離をとることは、有効な予防策です。しかし、では病気になった人は全て、見捨てられていたかと言うと、必ずしもそうではなく、「看病」や「看護」も行われていました。世界最初の「病院」は、教会や修道院から始まったと言われていますが、「感染リスク」というハードルを越えて、その人々を「看病」「看護」に向かわせたのも、やはりこの「その最も小さな者にしたことは、私にしたことなのだ」という言葉だったのではないのでしょうか。

「その最も小さな者にしたこと」として、イエス様、王様は言われました。35節からですが「私が飢えていたときに食べさせ、喉が渴いていたときに飲ませ、よそ者であったときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のとときに世話をし、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」……。この一連の言葉は、以前の新共同訳よりも、新しい聖書協会共同訳の方が、相応<sup>ふさわ</sup>しく訳しているように思います。「飢えていた時に食べさせ、喉が渴いていた時に飲ませ」、3番目は新共同訳では「旅をしていたときに宿を貸した」でしたが、正しくは「外国からの寄留者、難民、よそ者であった時に、のけ者にせず、仲間に入れてくれた」です。また5番目の「病気のとときに世話をした」も、以前の新共同訳では「見舞い」でしたが、これも「病人の世話、看護をした」の方が正しい意味です。

これら一連のことは、有り余って持っている人から、持っていない人に対して与えられ、行われたことだったのでしょうか。もちろん、そうではありません。イエス様の周りに集まり、その言葉と振る舞いに接していた人々は、実際に飢え渴き、日々の食事を得るために働く人たちであり、社会の中からつま弾<sup>はじ</sup>きにされていた「よそ者」たちであり、身に着けるものもろくに持たず、力弱く病気で、様々な廉<sup>かど</sup>で牢に入れられた人たちでした。

ろくに何も持っていなかった人たちが、力弱い者同士でありながらも、「放っておけない」という一心で食べ物や飲み物、着る物や持ち物を分け合い、仲間となりました。イエス様自身が貧しく、日銭を稼いで糊口<sup>ここう</sup>をしのぐ生活をされて来た方であり、差別される苦しみも、雇ってもらえないしんどさも、そしてそのような仲間同士の支え合いも、身をもって経験さ

れて来た方でした。ですから、そのようなイエス様は、人々がそうやって自然と<sup>おこな</sup>行っていた連帯の中に、「そこに私も一緒にいる」「その一人にしたことは、私にしたことなんだよ」と言われたのだと思います。

さて、このイエス様の言葉から 2000 年を経た今、私たちに求められていること、イエス様から呼びかけられていることは、一体何でしょうか。飢えている人、渴いている人、難民認定申請中の人々、裸の人、牢の中にいる人を探して、それらの人の所に出かけて行って、何かをしてあげることでしょうか。イエス様が言われたのは、そんな「上から目線」の「してあげる」ことではなかったはずです。「まず『小さな者』を大切に」すること……。その「小さな者」たちとは、私たちの身近にいる人たち、家庭や職場、近隣にいる方々で、後回しにされている人たちです。思わず「放っておけない」と感じてしまう方々です。その人たちとの自然な分かち合い、横の関係での交わりの中に、他でもないイエス様も共にいて下さいます。

まだまだ続くコロナ禍の中、もともと所得が少ない人ほど、収入が減り、貯金が底をついて路上に出てきている人が増えて来ていると耳にするようになりました。今日もこの後、釜ヶ崎・いこい食堂へのおにぎり作りを、少し数を増やして行う予定です。しかし、それは釜ヶ崎だけの問題ではなく、全国各地で、それぞれの方の身近な所でも、次第に目に見えて来るようになるのではないかと思います。自分に出来ること、自分に求められていることに、耳を澄ましていたいと思います。

「まず『小さな者』を大切に」……。その「小さな者」と共に、その中におられる神様は、私たちの中にもいて下さいます。その神様からの力を頂きながら、与えられた実りの恵みを分かち合うために、私たちは今日も導かれて行きます。